

算盤組立職人

Vol.04 師匠



-----2025/11/11から

龍雲のいう「アレ」とは何なんだ？
YouTubeの動画を覗き込んでみた。

「……」

「これは…無理？」

「だろー」

そこに映し出されたのは、中学生が技術の授業で本棚とか作っている時の作業とほぼ同じような光景だった。

「佐藤くん、僕はこの作業ができる気がしないんだよね。」

「確かに俺も苦手だな、これ。」

映し出されていた映像とは、ノコギリ一本でほぞ組を作っているものであった。淡々とほぞを作っていく。どうしてまた、それが精緻極まりないのである。

「絶対毎日シバかれるよー！」

高齢な職人ならたぶん、間違いない。

「いやいや、今どきはそんなに怒られないってー。」

「佐藤くんよ、目が泳いでるじゃないかー。」

「コレ、絶対アカンやつ。」

「ま、行くとって言ったんだから何とかしてみなよ。意外とどうにかなるもんだぜ。」

…何も根拠はない。

「わかった、何とかする！ 自分でやり始めたことなんだから投げ出さない。」

今回はなにか違うような雰囲気である。

「ただ、無理なら前向きに退却する！」

「退却するんかい！」

うーん、何だかあまり乗り気にはなれなかったようであるが大丈夫だろうか？ 彼は元来引っ込み思案であり、あまり表に出ようとしたがらない。なので私は、彼はコ

ツコツと行うような職人に向いていると思っていたのである。まあ職人が人前に出て話すことなんかこれっぽっちもあるわけがない、心配はないだろう。

そしてとある日曜日、近くのコーヒー店でモーニングでも食べに行こうかと誘われた。

「会ってきたんだよ、佐藤くん。」

「あー、役員さんにか。」

「いや、その人にも会ったけど、」

「ふむ。」

「レジェンドな職人だよ。」

職人…？ってことは？

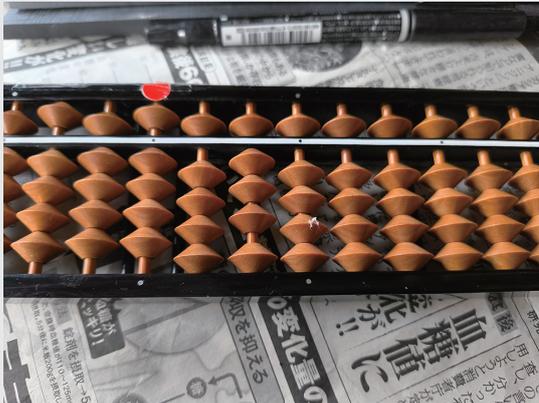
「いわゆる、『師匠』にかー？」

「そう『師匠』ってヤツだよ、佐藤くん。」

特に不穏な空気はないので、結果は良かったのだろうか？

「で、どうだったんだい、その『師匠』とやらは？」

-----2026/11/11まで



profire 高山辰則(龍雲)

2014年より、伝統工芸士/宮本一廣氏のもとで修業。

2015年に播州小野算盤工房shinを立ち上げる。

「全ての人ではなく、できるだけ多くの人に気に入ってもらえる商品を作れ」という師の言葉を継承し、伝統的

工芸品づくりを通じて、その歴史や技術を後世に伝えるために日々努力をしています。

播州小野算盤工房shin / 高山辰則(龍雲)

<https://tkymtatz.wixsite.com/abacus>